



TITLE:

京大東アジアセンターニューズレ ター 第642号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

CITATION:

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター. 京大東アジアセン
ターニューズレター 第642号. 京大東アジアセンターニューズレター
2016, 642

ISSUE DATE:

2016-10-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/217082>

RIGHT:

2016 年 10 月 24 日発行 第 642 号

CONTENTS

アジア自動車シンポジウム 2016 のお知らせ	2
「中国経済研究会」のお知らせ	3
中国経済シンポジウム 2016 のお知らせ	4
読後雑感：2016 年 第 24 回 小島正憲	5
中国電力産業の ASEAN への進出 福喜多俊夫	12
【中国経済最新統計】	14



アジア自動車シンポジウム 2016 のお知らせ

主催

京都大学東アジア経済研究センター

共催

東京大学ものづくり経営研究センター

東京大学社会科学研究所現代中国研究拠点

京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター

後援

京都大学東アジア経済研究センター支援会

アジア自動車シンポジウム 2016

新興国における部品現地調達を考える

—部品国産化ライフサイクルを一つの視座として—

■京都会場 2016 年 11 月 5 日(土) 13 時

京都大学経済学部三番教室(法経東館 2 階)

■東京会場 2016 年 11 月 7 日(月) 13 時

京都大学東京オフィス(新丸の内ビルディング 10 階)

13:00-13:20 挨拶

東京大学ものづくり経営研究センター ディレクター 新宅 純二郎
東京大学社会科学研究所現代中国研究拠点長 丸川 知雄

13:20-14:40

問題提起: 部品国産化ライフサイクル 京都大学 経済学研究科 教授 塩地 洋

14:40-15:10

サプライチェーンの複雑化と深層の現地化 東京大学 経済学研究科 教授 新宅 純二郎

15:30-16:00

日系サプライヤーの現地化基本戦略 立命館大学 経営管理研究科 准教授 佐伯 靖雄

16:00-16:30

現地 2 次サプライヤーの技術能力—深化を制約するか 桜美林大学 経営学研究科
教授 井上 隆一郎

16:30-16:50

総括コメント 東京大学 社会科学研究所 教授 丸川 知雄

16:50-17:00

閉会挨拶 京都大学 経済学研究科 准教授 田中 彰

17:10-18:30

懇親会 参加費 2000 円(支援会会員は無料)

参加の御申込は、塩地 shioji@econ.kyoto-u.ac.jp 宛に、①会場名、②氏名・所属、③懇親会出欠を御連絡ください。シンポジウムの参加費は無料、懇親会は 2000 円です。ただし支援会会員は懇親会も無料です。

東京会場は定員 90 名、京都会場 200 名です。お早めにお申し込みください。

なお東京会場は会場が小さいため、御申込は支援会会員のみとさせていただきます。

支援会入会につきましては塩地までお問い合わせください。

「中国経済研究会」のお知らせ

2016 年度第 6 回（通算第 60 回）の中国経済研究会は下記の要領で開催することになりましたので、ご案内いたします。大勢の方のご参加をお待ちしております。

記

時 間： 2016 年 11 月 15 日（火） 16：30－18：00

場 所： 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館地下 1 階
みずほホール AB

テーマ：「東アジア低炭素共同体」の構築と「政策工学」の創成

報告者： 周 瑋生（立命館大学政策科学部教授）

注：本研究会は原則として授業期間中の毎月第 3 火曜日に行いますが、講師の都合等により変更する場合があります。2016 度における開催（予定）日は以下の通りです。

前期：4 月 19 日（火）、5 月 17 日（火）、6 月 21 日（火）、7 月 19 日（火）

後期：10 月 18 日（火）、11 月 15 日（火）、12 月 20（火）、1 月 17 日（火）

（この研究会に関するお問い合わせは劉徳強（liu@econ.kyoto-u.ac.jp）までお願いします。なお、研究会終了後、有志による懇親会が予定されています。）



中国経済シンポジウム 2016 のお知らせ

中国経済の安定成長に向けて

主催： 京都大学東アジア経済研究センター
共催： 人文科学研究所付属現代中国研究センター
後援： 京都大学東アジア経済研究センター支援会

時 間： 2016 年 12 月 3 日(土) 14:00～18:00
場 所： 京都大学吉田校舎時計台記念館 2 階、国際交流ホール
使用言語： 日本語、中国語（日本語通訳あり）
参 加 費： 無料

14:00-14:10 挨拶

文 世一（京都大学経済学研究科科長・教授）

14:10-14:30 問題提起：

劉 徳強（京都大学地球環境学堂/経済学研究科教授）「中国経済の動向と課題」

14:30-15:50 講演 I

秦 雪征（北京大学経済学院副教授・院長補佐）「中国経済の新常態と成長方式の転換」

15:50-16:05 ————— コーヒーブレイク —————

16:05-17:00 講演 II

章 政（北京大学経済学院教授・生涯教育学院院長）「中国の農村発展と土地問題」

17:00-17:50 質疑応答

章 政（北京大学経済学院教授・生涯教育学院院長）
秦 雪征（北京大学経済学院副教授・院長補佐）

17:50-18:00 閉会挨拶

宇仁宏幸（京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター長・教授）

18:10-19:40 懇親会

会 場： 京都大学吉田校舎時計台記念館国際交流ホール

参加費： ￥2000 円(東アジア経済研究センター支援会会員は無料、学生は 1000 円)

※シンポジウムの参加費は無料である。準備の都合上、参加ご希望の方は 11 月 22 日(火)までに氏名・所属・メールアドレス、及び懇親会参加の有無を東アジア経済研究センター事務局（ceaes2010@yahoo.co.jp）にまでお知らせください。

読後雑感 : 2016 年 第 24 回

17.OTC.16

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事
株式会社小島衣料オーナー
東アジアセンター外部研究員
小島正憲

1. 「週末介護」 2. 「我流老人」 3. 「老後ひとりぼっち」
4. 「90 歳。何がめでたい」 5. 「人間の煩悩」 6. 「ああ面白かったと言って死にたい」

1. 「週末介護」 岸本葉子著 晶文社 2016 年 7 月 30 日

帯の言葉 : 「90 歳、認知症の父を送る。仕事との両立、兄弟間意見の調整、親の変化への覚悟、お下問題…」

本書は、エッセイストの岸本氏が自分の介護体験を綴ったものであり、認知症の 90 歳の父親を、50 歳の実の娘が看取るというものである。本書に綴られている岸本氏の介護体験は、巷で話題になっているような壮絶なものではなく、どこか微笑ましい感じのするものである。まずこれは父親の温和な性格から来ているものなのだろう。私の母親と比べたら、雲泥の差である。このような男性は少ないと思うし、私には実母であっても岸本氏のような介護は無理だろう。次に岸本氏が 50 歳代と若く、まだ体力があり、老老介護という状況になっていないことも、大きな要因だろう。私の実母はやがて 100 歳、私は 70 歳、典型的な老老介護であり、これまたとても岸本氏のような介護は不可能である。さらに岸本氏の場合、介護に携わっているのが、兄と姉、姉の息子、岸本氏の 4 人であり、それが見事なチームワークで介護を行っているおり、岸本氏は週末のみの介護になっている。これが負担の分散となって大きな効果をもたらしている。通常の場合、介護者間の対立はもっと厳しいものとなる。その上、岸本氏の介護期間は 5 年で終わっていることが幸いしている。これが 10 年以上続くと、経済的負担ものしかかってきて、岸本氏のような牧歌的な介護はほぼ不可能となる。蛇足になるが、岸本氏が独身であり、子どももないことも介護を容易にしているのだろう。

2. 「我流老人」 埜野堯著 KK ロングセラーズ 2016 年 10 月 1 日

帯の言葉 : 「気にしない! 気にしない! しがらみは捨て 俺の“老人道”を生きてやるっ!」

埜野氏は本書の最後で、「日本老人党」を結成しようと提案している。埜野氏は、この「日本老人党」を、「これは仮の名前で、老人連盟でも老人組合でも何でもいい。要は老人が団結して、世の中を匡団体のことである」と定義している。そしてその活動内容についてもあれこれと書いている。その中身はともかくとして、高齢者に対する行動提案としては、私もこれに同意する。また、「人類も進化してきたのだから、ぼつぼつ自由主義、民主主義を超越した新しい哲学を生み出しても良さそうだが」と書いており、これも至当である。

ただし上記を除くと本書のほとんどが、埜野氏の繰り言で終始しており、あまり建設的ではない。また、「老人はあと何年生きるかは、自分ではわからない。これがわかれば苦労はないが、こればかりはどうにも見当がつかない」と嘆くのみで、自ら死期を定めるという発想には至っていない。さらに、「長寿は人間にとって、周囲が囃し立てるほど、めでたいことでも喜ばしいことでもない。少なくとも日々身体は衰え、病気、死と古希前後から必ず始まる現象は決してうれしいことではない。自らの意思で行動もできなくなって何があるというのだ」、「老人も襟を正して、介護などを期待しないことだ。足腰が立たなくなってしまえば、もうこれまでと観念しよう。寝たきりになり人手に頼ってまで生きながらえても何もいいことはない」とも書いているが、足腰が立たなくなる前に、あるいは自らの意思で行動できなくなる前に、「自らの意思で死を選ぶ」という発想にも行き着いていない。これでは普通の老人と全く変わらず、「我流老人」などとはおこがましくて言えない。

3. 「老後ひとりぼっち」 松原惇子著 SB 新書 2016 年 9 月 15 日

帯の言葉 : 「結婚してても、子アリでも、最後はひとり。 4 割が“独居老人”の時代に!」

著者の松原氏は、ひとり女性の老後を応援する団体・NPO 法人 SSS (スリーエス) ネットワークの代表理事である。本書はその組織の会員の体験を総括したものであり、高齢者女性についての分析には学ぶところが多い。

本書のもっとも特徴的なところは、高齢者問題の一つとして、「保証人問題」を取り上げていることである。これは他書にはない視点である。この「保証人問題」は、日本にのみある独特の悪習であり、それが高齢者が生きていくために、大きなネックになっているという指摘は、まさに正鵠を射ている。松原氏

は、「ひとりの人を困らせている社会における問題、それは、人生の大事な場面で“保証人”を要求されることだ。日本の社会では、就職する時、家を借りる時、病院に入院する時、介護施設に入る時に身元を保証する“保証人”を要求される。しかも保証人の要求だけで泣く、身内の保証人を立てるのが通例だ。まるで、この社会には身内のいない人はいないかのように」と書き、独身で通した高齢女性にとって、身内の保証人を立てることがきわめて難しいという現状を、多くの例で示している。

しかも松原氏は、それらの高齢女性を狙って、身元保証ビジネスが暗躍していると書いている。さらにそのようなビジネスを行っていた「公益財団法人日本ライフ協会」が破綻して、そこに依存していた高齢者が大損し、救いのないまま高齢難民となってしまった状況をリアルに描いている。

この「保証人問題」は、たしかに高齢者の抱える大きな問題の一つであり、法律面であるいは慣習面で、日本社会が早期に解決しなければならないことである。私も数年前、妻が大きな手術を受けようとした時、身内の保証人を要求され、面食らったことがある。しかも身内の保証人が夫ではダメで、息子か娘なら OK と言われて憤慨したことを覚えている。松原氏は、本書の半分ほどを割いて、この保証人問題を書いている。これだけで本書の価値があると、私は思う。

松原氏は、「孤独を楽しむ力を身につけよ」と書き、「“孤独死だけは避けたい”と言うひとり暮らしの方は多い。誰かに看取られないで死ぬのは寂しいというイメージを持っているからだろうか。それとも、死んでから何日も発見されない人と人に迷惑かかるからか。孤独死だけは嫌だと言う人に話を聞いてみると、笑い話なのかと思うほど、心配していることがおかしい」と書いている。私もまったく同意見である。

4. 「90 歳。何がめでたい」 佐藤愛子著 小学館 2016 年 8 月 6 日

帯の言葉：「御年 92 歳、もはや満身創痍、ヘトヘトでしぼり出した怒りの書」

本書の最後で佐藤氏は、「ああ、長生きするということは、全く面倒くさいことだ。耳だけじゃない。眼も悪い。始終、涙が滲み出て目尻目頭のジクジクが止まらない。膝からは時々力が脱けてよろめく。脳ミソも減ってきた。そのうち歯も抜けるだろう。なのに私はまだ生きている。“まったく、しつこいねえ”思わずつぶやくが、これは誰にいつているのか、自分にか？ 神様にか？ わからない。ついに観念するときが来たのか。かくなる上は、さからわず怒らず嘆かず、なりゆきに任せるしかないようで。“ものいわぬ婆アとなりて 春

暮るる」と書いている。これが高齢者の偽らざる心情だと思う。

佐藤氏は本書の随所で、現代社会への恨み節を書き綴っている。そして「この頃のこの国を、やたらにギスギスとして小うるさく、住みにくくいちいちうるさく感じるようになってるのは、何かにつけて雨後の筍のように出てくる“正論”のせいで、しかしそう感じるのは私がヤバン人であるためだということがここまで書いてきてわかった」と書いている。

さらに佐藤氏は新聞の人生相談について論評し、「俗に“恋は熱病”とか“恋は盲目”とかいわれている。愛と恋は違う。愛は積み重ねで昇華していくものだけれど、恋は燃え上がってやがて灰になってしまうものだ」、「歳月は覚悟も勇気もなし崩しにしてしまう容赦ない力を持っている。私は90年の人生でまぎまぎとそれを見てきた。恋も熱病である限りやがては熱が下がることも。それが人間というものであり“生きる”とはそういうことなのだ」と、恋や愛に身を焦がしている若い人たちに水をぶっかけるような、身も蓋もないことを書いている。私も同感ではあるが。

そしてわが身を、「私は92年の人生をあと先考えずに生きて来たもので、そのために次々と災難を引き寄せてきた。誰のせいでもない、そんな私の性が引き寄せる災難だから、どこにも文句のつけようがない。夫が悪いと親のせい、誰そのせい、あいつに騙されたなどといいたくても、どう考えても私の我が儘や協調性のなさや猪突猛進の性のために降りかかった苦勞であることは明らかであるから、恨むなら自分を恨めということになって、仕方なく諦める。反省して諦めるのではなく、あっさりすぐに諦めるものだから、懲りずにまた同じ過ちを繰り返す。人生をいかに生きるか、なんて考えたこともない。その場その場でただ突進するのみだった」と振り返っている。これには、同感できる部分もあるが、異論もある。

5. 「人間の煩悩」 佐藤愛子著 幻冬舎 2016年9月25日

副題： 「激動の92年を生きてきた著者による人生の醍醐味とは！ 悩みの量こそが人間の深さ」

私は最近、煩悩の捉え方が、仏教各宗派でかなり相違があるということを知ったが、佐藤愛子氏は巷に流布している煩悩という用語の理解で、本書を書いている。まず佐藤氏は、「人間は死期を察知できないもの」という常識を前提として本書を組み立てている。私は、これからの老人には「自ら死期を設定」することが求められるし、それが規範化し、常識化してくると考えている。また佐藤氏は男女の仲についても、二度離婚を経験した老女の立場から、意味深

長なことを書いているが、これも常識の範囲を超えないもので、そこから新しい思想を汲み取ることはできない。世間は佐藤氏のことを、毒舌家のようにいうが、私は正論であり、常識を述べているだけであると思う。ただしあまり建設的ではないが。下記に本書の要点を抜き書きしておく。

- ・死ぬときがわかっていればそれに見合う暮らし方ができるのだが、一寸先は闇だから、不自由だ。

- ・私は病院に頼らなくなってから、もう 20 年になる。死んでもいいと思っている者を検査漬けにして生かそうとするのは僭越じゃないか、と私は言いたい。老人医療は苦痛を取り除いて安らかに死へ導くという考えをもってもらわねばはいかないだろうか。

- ・死と向き合って生きる者にとって必要なことは、欲望をなくし、孤独に耐える力を養うということだという考えに私は辿り着いた。たまたま、「欲なければ一切足る、求むることあれば万事窮す」という良寛の言葉をみつけ、私は意を強くしている。

- ・人間は生まれたときから死に向かって歩いていたのだ。年をとれば眼はかすみ、耳は遠くなり、歯は抜け、血管は疲労して皮膚も筋肉も弾力を失う。それが生きとし生けるものの自然なのだ。その自然に逆らっても逆らわなくても、どおちにしても人間は死ぬ。

- ・今、私が直面している問題は、いかに自然に老い、自然にさからわずに死んでいけるか、ということだ。いかに孤独に耐え、いかに上手に枯れていくか。長命がめでたいのは、心も肉体も枯れきって死ぬるからめでたいのだと、私は思っている。肉体にエネルギーが残っている間は死ぬのは容易ではない。心に執着や欲望を燃やしたまま死ぬと、死後の魂は安らかでない。人は死んだら無になるのではない。死後の世界はあると私は信じる。

- ・人間には霊媒体質とそうでない人として、前者はその体質ゆえに霊的体験をするが、後者は何も体験しないので、前者のいうことを簡単に嗤うのである。自分が見えたり聞こえたりしないからといって、見えたり聞こえたりする人をうさんくさい奴と断定するのは傲慢というものではないか。

- ・ごく大ざっぱに、結婚の罪の方をいうなら、まず自由がないことだろう。独身者はすべての時間を自分のものとして使うことができる。だがその自由の代わりに孤独がある。孤独の中には自由という蜜があるが、同時に緊張を伴っている。

- ・女に生まれてよかった、と私は思う。男ってたいへんだなあ、と同情する。自由というものは男だけにあって、女にはないものと今までは思っていたが、

この頃は、どうやら女にあって男にはないものなのかもしれないと思い始めた。今、私に愛する夫がいれば、イヤなものはイヤといい、貧しくても自由に暮らす暮らしかたを容認するだろう。女が強くなるということはそういうことではないか。しかし残念なことには、そのように寛大になったときには夫はいないのである。

・泣く女がいいか、泣かぬ女がいいかと問われると、泣かない女がいい、と答えは決まっている。しかし泣く女がトクか、泣かぬ女がトクかと訊かれれば、泣く女がトクだといわぬわけにはいかない。それゆえか、泣く女は後を絶たぬ。それが何とも腹立たしく情けない。だがしかし、女が涙を見せれば男の心は動くというが、女は女でもばあさんが泣くと男は舌打ちをする。それがまたいっそう、腹立たしく情けないのである。

・世の妻は夫の浮気に対して、静かに座し、目を半眼にして夜半の嵐でも聞くようなつもりでそれが通り過ぎるのを待つ—それこそ理想の妻であると私は思う。浮気浮気と目の色を変えなさるな。長い人生、一度や二度は夫に騙されてもいいではないですか。

・不実、裏切り者と簡単にいうけれど、彼ははじめから不実な人間として存在しているわけではなく、「不実な人間ではないのだが、結果的に不実になってしまった」という場合だって少なくない。気が弱いから不実になった男もいるだろうし、気が弱いから不実を働かなかった男もいる。また男をして、「不実にさせてしまう女」がいる場合もあるし、不実な男を「不実でなくさせた女」がいる場合もある。不実かそうでないかは組み合わせの問題である。

6. 「ああ面白かったと言って死にたい」 佐藤愛子著 海竜社 第1刷 2012年7月30日：第17刷 2016年9月22日

帯の言葉： 「波瀾万丈の日々が紡ぎ出した人生の真実！」

8～9月にかけて、佐藤愛子氏の著書が立て続けに出版された。上掲3.の「90歳。何がめでたい」はほぼ書き下ろし、結構売れているという。4.の「人間の煩惱」はこの数年に書かれたものの抜粋、そして本書は初版が4年前で、その時点までの佐藤氏の人生観を過去の著作から抜粋したものであり、第17刷を数えている人気作である。今回は、その3冊を読み比べてみたが、70～90歳までの佐藤氏には、あまり変化がないように読み取れた。

佐藤氏は70歳ころには、「長生きをして我慢の力を涵養し、自然に枯れていって枯木のように朽ち倒れる。それが私の死に方である」と語っていたが、80代後半になっても、「長寿がめでたいのは、長く生きたことによって自然に枯

木になって死んでいけるからであろう。エネルギーが涸れれば、執着も自我も恨みも妬みも、そして死への怖れも枯れていく」、「人間すべて老いれば孤独寂寥に耐えねばならないのである。それをしっかり耐えることが人生の総仕上げなのだ」、「人生は美しいことだけ憶えていればいい。私はそう考えている。苦しいことの中に美しさを見つけられればもっといい。“－ああ面白かった”死ぬとき、そう言って死ねれば更にいい。私はそう思っている」、「誰かの役に立つ。報酬なしでだ。それこそ誇るべき老後の幸福だ」などと、あまり変わり映えのしないことを書き綴っている。

佐藤氏自身の人生観も、「私は波瀾万丈を経験することによって、女の人生の面白さを味わうことができた。怒りや嘆きや苦しさが、私の中に埋もれていたものを掘り出してくれた。私の中にはまだ、埋蔵されているものがあるのではないか？私はそう思う」と書き、最近では、「まことに人間万事塞翁が馬だ。禍福は糾う縄の如しだ。不幸な結婚は私を作家にしてくれた。借金は金への執着から私を解き放ってくれた」と書いている。これもあまり変わっていない。

独特の男性観も、「女にサービスすることを知っている男は、何らかの点ですぐれた個性を発揮している人たちであり、心の余裕持っている人たちである」、「このごろになってようやく男の強いのは主として膂力であったことがわかってきた。耐久力、我慢の力は女には及ばない。男は小心で、寂しがりの弱虫だったのだ。病気になったときの男の騒ぎよう、つらがりようを見ると、苦痛に耐える力がないことがよくわかる」と、変わらない。ちなみに膂力とは、広辞苑によれば、「筋肉の力。腕力」。

以上

中国電力産業の ASEAN への進出

一般社団法人大阪能率協会常任理事、順利包装集团董事长（在上海）

福喜多技術士事務所所長、東アジアセンター外部研究員

福喜多俊夫

先に「中国の再生エネルギー」について報告した際、中国電力産業の実態について触れたが、最近、中国電力産業は ASEAN への進出を意図しているように見える。

中国網（9 月 19 日）によれば、9 月に広西チワン族自治区南寧市で開かれた第 13 回中国－ASEAN 博覧会のサブフォーラムで、100 名余りに上る中国と ASEAN の代表者は中国と ASEAN の電力提携について話し合った。参加した代表者は、世界のエネルギー需要の中心が「東に移動」するにつれ、中国と ASEAN の電力提携に追い風が吹き、クリーンエネルギーや再生可能エネルギーを一次エネルギーとする電力提携が中国の電力企業による ASEAN 市場進出の新たな商機になるとの見方を示した。

1. 中国の電力産業の現状

2016 年 7 月末時点で、中国の 6000 キロワット以上級発電所の発電容量は 15 億 3000 万キロワット。うち水力発電は 2 億 8000 万キロワット、火力発電は 10 億 2000 万キロワット、原子力発電は 3070 万キロワット、送電網接続風力発電は 1 億 4000 万キロワット、太陽光発電は約 7000 万キロワットに上った。中国の電力ネットワーク規模、発電総容量、総発電量、火力発電、水力発電、風力発電、太陽光発電はいずれも世界トップとなっている。

2. 電力産業の「走出去」

電力産業の急成長は、中国の電力企業による「走出去（海外進出）」の基盤を固めた。中国電力企業聯合会の常務副理事長を務める楊昆氏は、中国政府が打ち出した「一帯一路」と「グローバルエネルギーネットワーク構築」の構想にもとづき、中国の電力企業が国際提携を持続的に強化しており、中国の電力企業が 2015 年に米国やロシアなど 20 カ国超の地方政府、企業、大学と提携協定や覚書を結び、戦略的協力を進めたことを明らかにした。中国の統計によると、2015 年に中国の主要電力企業 11 社が行った投資の総額は 28 億 9800 万米ドルに上った。海外請負工事建設中プロジェクトの契約額は前年同期に比べ約

17.3%増の累計 1547 億 7100 万米ドル、新規契約額は約 8.8%増の合計 472 億 500 万米ドル。電力設備と技術の輸出総額は 136 億 5900 万米ドルに約 153%増加した。

3. 中国電力産業の ASEAN 進出

ASEAN のなかで中国の電力企業はベトナム、ラオス、ミャンマー、タイ、フィリピンなどの国と電力資源の開発で提携しており、プロジェクト投資・建設と電力エネルギーのクロスボーダー取引の提携度と範囲は絶え間なく広がっている。会議に出席した中国国家電網公司の代表者は、同社がすでにミャンマー北部カチン州 230 キロボルト主幹ネットワーク開通工事の契約、ラオス 500/230 キロボルト・ビエンチャン環状ネットワーク送変電プロジェクトの総請負契約、インドネシア国家電力会社と枠組み協定を締結したことを明らかにした。中国広核集団（中広核）は中広核東南アジア公司を設立し、その本社をマレーシアのクアラルンプールに置くことを決めた。ASEAN 諸国でクリーンエネルギープロジェクトへの投資を計画している。中広核新エネルギー控股有限公司国際事業部の蔣南総経理は、同社がマレーシアのマラッカ 200 万キロワット級ガスプロジェクトやケダ太陽光発電プロジェクトなどのクリーンエネルギープロジェクトの建設に向けて準備していると話した。世界で最も実力を有する水力発電技術大国として、中国の一部の企業が隠されている巨大な市場の潜在力に目を付けた。中国の電力企業のなかでも早期に ASEAN 進出を果たした南方電網公司は、その傘下にある広西電網公司が相次いで ASEAN 各国のベトナム、ラオス、ミャンマー、カンボジアで水力発電所建設プロジェクトを受注した。

以上

【中国経済最新統計】

	① 実質 GDP 増加率 (%)	② 工業付 加価値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億 ^{ドル})	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009年	9.1	11.0	15.5	▲0.7	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011年	9.2	13.9	17.1	5.4	24.0	1549	20.3	24.9	1.1	9.7	13.6	14.3
2012年	7.7	10.0	14.3	2.7	20.7	2303	7.9	4.3	▲10.1	▲3.7	13.8	15.0
2013年	7.7	9.7	11.4	2.6	19.4	2590	7.8	7.2	▲8.6	5.3	13.6	14.1
2014年	7.4	8.3	12.0	2.0	15.2	3824	6.1	0.4	4.41	14.2	12.2	13.6
9月	7.3	8.0	11.6	1.6	11.5	310	15.1	7.2	9.4	1.9	11.6	13.2
10月		7.7	11.5	1.6	13.9	454	11.6	4.6	8.7	1.3	12.1	13.2
11月		7.2	11.7	1.4	13.4	545	4.7	-6.7	-8.6	22.2	12.0	13.4
12月	7.3	7.9	11.9	1.5	12.6	496	9.5	-2.3	6.1	10.3	11.0	13.6
2015年	6.9	5.9	10.7	1.4	9.7	6024	-9.8	-14.4	11.0	0.8	11.9	15.0
1月				0.8		600	-3.3	-20.0	2.2	-1.1	10.6	14.3
2月				1.4		606	48.3	-20.8	49.8	0.1	11.1	14.7
3月	7.0	5.6	10.2	1.4	13.1	31	-15.0	-12.9	0.3	1.3	9.9	14.7
4月		5.9	10.0	1.5	9.6	341	-6.5	-16.4	2.9	10.2	9.6	14.4
5月		6.1	10.1	1.2	9.9	595	-2.4	-17.7	-14.0	8.1	10.6	14.3
6月	7.0	6.8	10.6	1.4	11.6	465	2.8	-6.3	4.6	1.1	10.2	14.4
7月		6.0	10.5	1.6	9.9	430	-8.4	-8.2	9.6	5.2	13.3	15.7
8月		6.1	10.8	2.0	9.1	602	-5.6	-13.9	23.9	20.9	13.3	15.7
9月	6.9	5.7	10.9	1.6	6.8	603	-3.8	-20.5	5.2	6.1	13.1	15.8
10月		5.6	11.0	1.3	9.3	616	-7.0	-19.0	2.5	2.9	13.5	15.6
11月		6.2	11.2	1.5	10.8	541	-7.2	-9.2	27.7	0.0	13.7	15.3
12月	6.8	5.9	11.1	1.6	6.8	594	-1.7	-7.6	17.2	-45.1	13.3	15.0
2016年												
1月			10.3	1.8	18.0	633	-11.5	-18.8	14.1	-2.1	14.0	15.2
2月			10.2	2.3		326	-25.4	-13.8	-11.3	-1.3	13.3	14.7
3月	6.7	6.8	10.5	2.3	11.2	299	11.2	-7.4	26.1	4.0	13.4	14.7
4月		6.0	10.1	2.3	10.1	456	-2.0	-10.5	21.4	2.9	12.8	14.4
5月		6.0	10.0	2.0	7.4	500	-4.7	-0.1	43.6	-4.8	11.8	14.4
6月	6.7	6.2	10.6	1.9	7.3	479	-6.1	-9.0	8.5	4.4	11.8	14.3
7月		6.0	10.2	1.8	3.9	502	-6.4	-12.9	-3.8	-6.2	10.2	12.9
8月		6.3	10.6	1.3	8.2	520	-3.2	1.4	13.2	0.5	11.4	13.0
9月	6.7	6.1	10.7	1.9	9.0	420	-10.2	-1.9	27.9	-3.6	11.5	13.0

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。

2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、()内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。

3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。